シカから学ぶランドスケープの仕事

Landscape Job Ability Learned from Sika Deer

吉岡　憲成　*Kensei YOSHIOKA*

㈱環境総合テクノス　環境部
KANSO Co., LTD., Environmental Engineering Dept.

１．学生時代の学びを活かせるフィールドへ

学生時代は造園学の研究室に所属し，小型サンショウウオの産卵環境について研究していた。学外では，まとまった時間を作って農村に滞在しながら，滞在地域の人々の暮らしについて学び，あるときはネパールに赴き，地元NPOと共に世界遺産の寺院を構成する森林の調査をするなど，好き放題やっていた。自分の興味の赴くまま動いていた学生時代であったが，結果的にランドスケープの分野に関連することばかりをやっていたと今になって思う。

幸運にも，学生時代に学んだランドスケープの分野の知識や考え方を実践し，社会に還元することができる仕事に就くことができた。コンサルタントとしての仕事を始めて僅か３年の私が，この業界の仕事の多くを語ることはできないが，若輩者なりの視点もあるのではないかと思い，筆を取らせていただく。後輩たちの仕事のイメージづくりや，諸先輩方にも刺激になるような内容となれば幸いである。

２．奈良のシカにまつわる仕事

現在取り組んでいる仕事の一つに，天然記念物「奈良のシカ」の保護管理に関する取り組みがある。

（１）奈良のシカとは

奈良の街に到着し，多くの人が最初に足を運ぶのは奈良公園であろう。つい先ほどまで街中にいたのだが，一歩公園に足を踏み入れると，そこで待ち構えているのはシカの群れである。このシカは国指定の天然記念物「奈良のシカ」であり，奈良公園のシンボルとして多くの観光客に親しまれ，重要な観光資源として奈良観光の柱となっている。特に，春日大社境内，奈良公園及びその周辺のシカは，古くから春日大社の神鹿として愛護されてきた。天然記念物指定理由として，「苑地に群れ遊んで人に与える餌をもとめる様は奈良の風光のなごやかな点景をなし」[1)]，「よく馴致され都市の近くでもその生態を観察することができる野生動物の群集」[1)] である点が評価されている。すなわち，奈良のシカが象徴しているものは，人の社会とシカという動物が織り成すランドスケープそのものであるように思う。

このように，奈良のシカは古くから保護の対象とされてきたが，人間社会との軋轢を含め，様々な課題があることも事実である。主要な課題として，シカへの不適切な餌付け問題，農作物被害があり，現在はこれらの課題解決のための調査，検討等に関わっている。

（２）シカへの不適切な餌付け問題

奈良のシカを取り巻くランドスケープは長年の鹿せんべい等の餌付けにより形成されてきた側面があるが，近年，観光客や地元住民による，パン類やスナック菓子等の，不適切な餌付け問題が深刻化している。これらは，シカの栄養，体調に悪影響を与える等，保護上の問題も大きい。また不適切な餌付けが原因の一つとなって，シカが観光客にケガを負わせる人身事故や，シカが車に轢かれる交通事故につながる可能性も指摘されている。このため，その実態を調査し，人身・交通事故との関連性を見るとともに，シカとの適切な接し方についての普及啓発方法など，重点対策を検討することとなっている。

実態調査では，奈良県が主体となり，鹿サポーターズクラブといった地元の市民団体や，研究者との協働で実施するなど，多様なステークホルダを巻き込んだ調査となった。産官学民が協力するこのような取組みは，今後の奈良のシカの保護の取り組みについて，ヒントを得られる調査となった（写真－１）。

写真－1　市民と共に実施した調査（写真中央付近が筆者）

（３）農作物被害対策

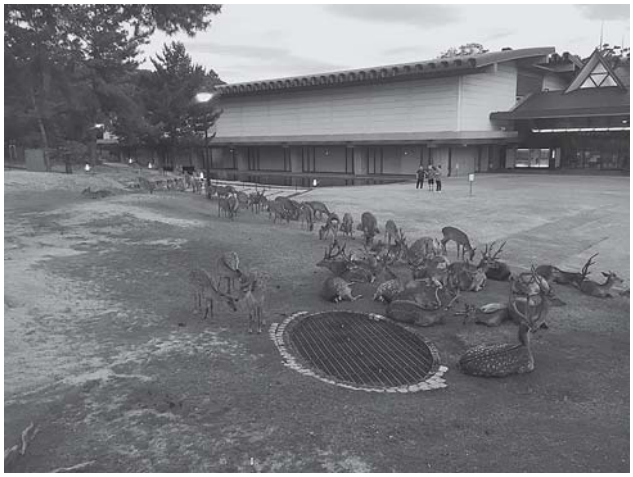
農作物被害については，鹿垣による侵入防止対策がなされるなど，古くから深刻であった。天然記念物指定後においても被害は報告され続け，地元農家が国等を相手取り被害賠償を求めた，通称「鹿害訴訟」にまで発展した。その後，奈良のシカの生息地をゾーニングした保護管理施策が取られ，農作物被害防止のための防鹿柵の設置が進められたものの，依然として農作物被害が発生し続けている実態があった。そこで，「奈良のシカ保護管理計画検討委員会」において，効果的な被害防除対策を検討するとともに，捕獲を含めた総合的な管理計画を検討する運びとなった。

被害防除対策の検討にあたっては，被害防除に効果的な条件を備えた防鹿柵の設置とその効果検証を行う実証実験を実施した。具体的には，シカの乗り越えや潜り込みを防ぐ条件を有しつつ，農家自身による維持管理が容易な防鹿柵の設置と，防鹿柵設置前後のシカの農地への侵入有無や行動変化を把握するため，センサーカメラ調査やGPSテレメトリー調査，ライトセンサスなどを実施し，防鹿柵の効果を検証した。そして，これらの科学的データや，これまでの知見をもとに，シカとの共生を図るための管理計画を検討，立案している。

３．現場の情報，その背景を読み解く態度

こうした様々な取り組みにあたって，実に様々な知識や技術が求められ，日々自分の未熟さを痛感するとともに，顧客である奈良県や検討委員会の委員の方々など，多くの人々とチームで取り組みながら社会の物事は進んでいくということを学ぶ日々である。その中で，私が大切にしていることは，現場で目に見えることとその背景を知ろうとする態度である。

現場に行くと，机上では到底分からない様々な情報を知ることができる。公園内のシカの一挙一足や観光客との関わり方，農地での被害や農家の生の声，防鹿柵設置にあたっての細かな施工上の工夫検討など，これら一つ一つが大切な情報である（写真－２）。



写真－２　奈良公園におけるシカの群れ
季節に応じてシカの行動も変化する。山間部では直接観察が困難な行動も観察できることは，「奈良のシカ」の魅力の一つである。

そして，現場に行くこととともに，その背景を知ろうという態度は，コンサルタントとして必要な姿勢の一つであると考える。背景とは，地質や植生といった自然科学的な側面だけでなく，その地域における人々の暮らしや民俗，歴史，土地の履歴，文化など，文化的な側面も含めてである。何年にもわたって受け継がれてきたそのようなものは，その土地における営みの表象であり，現場の理解を深めるとともに，課題解決へのヒントにもなりうる。

４．これから求められる能力

コンサルタントとは一言でまとめられる仕事ではないように思う。顧客の様々なニーズがあり，それに対して専門技術を駆使して最適解を提案することで，顧客よし，自社よし，社会よしの「三方よし」に近づけるようなイメージを持っているが，必ずしもそれだけではないであろう。

私が現在関わっている仕事において感じていることは，これから求められる能力として，開発へのアセスメントにおける環境保全対策だけではなく，今後の地域社会をよりよくしていくための創造的な作業を，顧客や地域の立場を理解しながら，共に取り組むための技術ではないかと考える。そのために必要な能力は枚挙にいとまがないが，「専門分野を活かして」という考えは捨てた方がいいように思う。ランドスケープという分野には他分野という考えはなく，生態学，分類学，土木工学，社会学，民俗学など，その場に必要な，あらゆる分野を総合して取り組むイメージの方が，私個人としては腑に落ちる。もちろん，その中に自身の武器となる得意分野があるといい。

したがって，学生時代に取り組んでいる専門分野にとらわれることなく，多くのことに興味を持ち，現場を訪ねる経験を重ねることが重要ではないかと考える。私自身もまだまだ半人前なので，様々な経験を積んでいきたい。

（略歴）
大阪府吹田市生まれ。京都大学大学院農学研究科森林科学専攻修了（環境デザイン学研究室）。2014年より現職。官公庁等より委託を受け，自然公園計画，自然環境保全基礎調査（植生図作成）の他，ニホンジカ等野生動物の保護管理計画，野生動物による農林業や森林生態系被害対策，各種生物調査に携わる。

参考文献

１）文化庁：国指定文化財等データベース
＜ http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index_pc.asp ＞